

日本NGOの続々現地へ

学生 食料分配など手助け 医師ら

部族間の抗争で内乱が続き、飢餓や病気で一日数百人とも数千人もいわれる死者が出ているソマリア。今月九日のアメリカ主導の多国軍の上陸で、治安が回復しつつあり、日本の非政府機関(NGO)ボランティア団体が支援のため続々と現地に向かっている。とかく「金は出すが、人は出さない」と批判的になる日本の海外援助。各団体は「まずは民間が動かねば」と張り切っている。



大學生、社会人で組織する「ジャパン・エマーシージェンシー・チーム(民間緊急救援隊)」(東京都)は八人を二面日中にもソマリアへ派遣する。すでに一人は今月十八日に日本を飛び立ち、エジプト・カイロで救援の準備を行っている。同チームは三年前に起きたサンフランシスコ地震がきっかけとなってできたホ

ランティヤ団体。同地震のほか、イラク国境のクルド難民キャンプ、エジプト・カイロ地震など海外での救援活動は二十一回と経験豊富。今回は医薬品、米、小麦粉、粉ミルクなどの物資約一トを現地へ運び、難民への食料分配などの仕事を約三か月間担当する。

在日ソマリア人から同国の自然環境や民族間の抗争などについてアドバイスを受けており、事前準備は十分。松井大倫代表(中央大四年)は「日本人として目に見える国際貢献を行ってきたい」と話している。

また、「アフリカ教育基金」と話している。二つの会ではこの医師二人を含め来年一年間で計十人の医師を送る計画で、基金の会の土井高徳事務局長は、他国のNGOと連携し、質の高い支援をしていきたい」と話している。

一方、今年十月に発足したばかりの民間ボランティア団体「ソマリア難民の障害児を支援する会」(青森市)は佐野治代表が今月三十日、現地に向かう。同会は障害者になったソマリアの子供たちに、車イスやつえなどの購入資金として月々一千元で里親になり、生活を援助しようというもので、これまで六十組の縁組ができた。

金の会(北九州市)と「アジア医師連絡協議会」(岡山市)は一月下旬、医師二人をソマリア人難民が収容されているケニア北東部の難民キャンプに派遣する。

周辺諸国へのソマリア人難民は約百万人に膨れ上がっており、ケニアだけでも約四十万人が押し寄せている。